
ご退職なさる先生方からのメッセージ



岩田秀行

茗荷谷駅を降り、春日通りを渡ってすぐの場所に大学はあった。程なく、都電の走る春日通りの反対側に、跡見学園があることを知った。夜行列車に揺られて上京した昭和42年のことである。これが私と跡見との最初の出逢いであった。

大学では川柳を研究することにした。その研究に取り組むうち、「海老茶式部」という女子学生をからかった言葉が、明治期の川柳から生まれたこと知り、それを論文に書いた。その時に、跡見女学校は他の女学校とは違い、少数学生にきちんとした教育を施しているという跡見花蹊の発言を見付け、それを論文に引用した。跡見という学校が妙に心に残った、二度目の出逢いであった。

そして不思議なことに、その跡見から専任の口が掛かったのである。死の床にあった母にそのことを報告した。疎開前、東京で教員をしていたためであろう、立派な学校に就職できると、母は心から喜んでくれた。私はまだ跡見の戦前の地位をよく知らずにいたので、母の喜びを予想だにしていなかったのである。跡見のお蔭で、死の間際の母に、たった一つの親孝行ができたのであった。

跡見では、また不思議なことに花蹊日記の翻刻に加わるようになった。難産のあげく、やっと解説を終えて出版へと進み、本郷の旅館に缶詰となって最終巻の校正刷りを通読した。読み来たって花蹊先生の最期の箇所に至った。意識はたどどしくなり、夢中に弥陀の妙味をいただき、そして筆が尽きる。6年間日記を読み続け、ただ一人、灯火の下で日記を読み終えたとき、私も先生の最期の場に居合わせたかのような感覚となり、熱い思いがこみ上げてくるのを禁じ得なかった。

いま、花の下を去ろうとして、遠く振り返れば、知らず識らず花の下道を歩き始める上京したばかりの大学生の私が見える。そして我に返ると、陽は既に西の山の端に暮れている。もはや下道に戻る時間は残されていない。思わずも辿り来たった細く長いこの小径は、はたしてこの先どこに続くのであろうか。

〈略歴〉 香川県生まれ。1973年、東京教育大学文学部文学科国語学国文学専攻卒。1982年、早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻博士後期課程満期退学。